

〔論文〕

背びれのない金魚についての歴史的・博物学的考察

A natural historical study for goldfish without dorsal fin

太田和 良 幸

OHTAWA Yoshiyuki

Summary

Among the Japanese goldfish, there is a breed called "Ranchu" that does not have a dorsal fin. This is a mutation that has caused a lack of a dorsal fin to be carefully preserved by humans, and in the end, the dorsal fin had disappeared. It must have taken many years to complete. In this paper, I have considered them natural historically based on information that can be understood from literature and materials, centering on when and how these dorsal finless goldfish were formed.

Most Chinese researchers have explained that the goldfish without dorsal fin appeared on the goldfish diagram published in an Encyclopedia of Chinese Qing Dynasty, completed in the early 18th century, was the first historical record in China. However, the result of this survey shows that, contrary to conventional wisdom, it goes back even more than three hundred years to the 15th century. I have confirmed that goldfish without dorsal fin may have existed in some parts of China (around the emperor) during the time of Emperor Xuande (around 1429), based on a fish drawing by the emperor of Ming Dynasty.

In Japan literature and drawings, goldfish without dorsal fin began to be seen in the 18th century. In Japanese Natural history, paintings of goldfishes with small dorsal fin or uneven backs are depicted to accurately represent the facts, but among the Japanese breeders, it was assumed that it was good to have no dorsal fin from the very beginning when it was brought from China.

On the other hand, it was newly found that the common people who loved goldfish in China, prefer the completely dorsal finless goldfish, but persons in a special position such as the emperor, prefer the "goldfish with a slight trace of the dorsal fin" or "goldfish with a sharp point like a horn on the back" as having special value.

And in modern times, no one loves this incomplete stage one, and fishes with no dorsal fin are bred as valuable all over the world. Also, the loss of the dorsal fin further increased the ornamental value of these breeds.

キーワード：金魚 きんぎょ 背びれがない 背びれの欠如 らんちう ランチュウ

Keyword : kingyo, goldfish, egg-fish, ranchu, goldfish without dorsal fin, dorsal finless goldfish

1 はじめに

金魚の中には、金魚の王様と言われている「らんちう」¹（図1参照）という品種など背びれがない金魚がいる。これは、突然変異で背びれが欠如したものを人間が丁寧にその形質を保存して、結局、背びれがないという遺伝子を固定してしまったからである。背びれが全くなくなるまでにかなり年数もかかったに違いない。

金魚の愛好家にとって、日本の「らんちう」をはじめとする背びれのない金魚はその他の品種と比べて特殊な愛好価値があるとする人もいる。その価値は鑑賞する人それぞれで異なるだろうが、背びれがあり、各ひれの長いタイプの金魚は優雅に見えるのに対し、背びれがなく、各ひれが小さい（短い）タイプの金魚は可愛らしく、愛嬌があると思う人もいるだろう。

こうした背びれのない金魚について、いつ頃どのようにして形成されたのかを中心として歴史的、博物学的に考察を加えた。本稿では、文献・資料から分かる情報を基に論じたが、金魚の背びれの欠如は実際には記録に現れる前から始まっていたと推察される。

なお、背びれのない金魚の中には、尾びれの比較的長い品種も見られるが、全体的には少数であるので、本稿では尾びれの長短については特に言及していない。

2 背びれの欠如とは

一般に魚には背びれがあるということは常識である。自然界では背びれのない魚はいない。丸太のような身体をしている肺魚や、ドジョウ、ウナギでもよく見ると背びれがある。尾びれと背びれが区別つかない連続したひれにも見えるが、ないことはない。背びれは水中で身体をふらつかせず、姿勢を安定させるのに重要な役割を果たしている。

では、何故背びれのない金魚が存在するのだろうか。それは、金魚が自然界で生活する魚ではないことに起因する。また、人間がこの変異を良しとしたからに他ならない。金魚は、人工的な環境で育てられるようになった赤色化したフナである。自然界なら天敵に襲われた時に俊敏に逃げられないと生命を維持できないし、水の流れの中で逆らって泳げないとどこかに流されてしまう。

他方、人工的な環境では、敵から身を守る必要もないし、餌を探して動き回る必要もない。ゆらゆらと漂っていて、与えられた餌を食べて生活すればよい。だから、突然変異によって体形に変化が生じてそれが生命の維持に重要なものでなければ問題ない。

人工的な環境で育てられた金魚は、筆者の繁殖経験から判断して他の魚と比べて突然変異が多く現れるように思うが、それよりも人の目につきやすい環境で育てられてきたからこそ、突然変異が各種保存されてきたのだと考えられる。突然変異は、魚の身体のいろいろな個所で種々の形態で起きるが、例えば、尾びれや目がない突然変異も時々見られる。尾びれや目がなくてもそれだけで死んでしまうわけではないので、問題ないが、見た目が悪いので、こういう突然変異を保存して新しい品種の金魚として残そうなどという人は殆

どいないし、それに賛同する人がいないと、品種としての維持が困難になる。

背びれの欠如は、育てる人間の側にその存続価値があったので、この突然変異は固定化されることになったと考えられる。近年、観賞メダカの品種改良の中でも金魚と同じ背びれのないメダカが出現している。

3 背びれの欠如による 体形の変化

3.1 生物学的体形変化

金魚の背びれの欠如の遺伝は、年月を経て完成された。現在は全く背びれのない金魚も形質が完成するまでは、一部にひれの痕跡が残り、こうした過程を経てきただろうと推察される。この一部のひれが残った状態をイラストで表したものが図2である。1と2はひれそのものが数條一部に残っているものである。3と4は、ひれというよりも、硬い棘條が残っているものである。

背びれの欠如によって金魚の身体に変化が生ずる下地ができた。変化しない魚も多いのだが、突然変異の連続によって変化する魚は以下のように変化してきたと考えられる。

① 低体高化

横から見て、背中が湾曲せず、「体高」（体の背から腹までの垂直方向の長さ）が高くならず、背中が平らになることができた。すなわち、背びれが全くなかったことにより、ひれを支える骨も筋肉も必要なくなったので、横から見て背中中央部が高くなる（湾曲する）必要もなくなったと言える。こうして、横から見て背が平らな魚が見られるようになった。

これは横から見ないと良くわからないが、実は②に記す通り、背が平らになることにより、上から見て、丸太のように太く見えるようになるとも言える。

② 体幅拡大

上から見て、平らになった背中により、魚体全体が太く、丸く見えるようになった。

江戸時代の書物などによると、現代の「らんちう」の原型が日本に入ってきた当初は、これを「金鼈」という名称で呼んだりしたようである。この意味は、正確には分らないが、和金や琉金を「金鼈」と呼んだという記録は見当たらないので、背びれのない金魚を上から見たら、横に広がったような形に見えたので、「金色のスッポン（金鼈）」と呼んだという解釈も可能であろう。なお、「金鼈」と呼んだ理由は、次の③で述べる鱗の輝きもその理由と考えられる。

このように、金魚を甕や桶に容れて、上から見るのが鑑賞方法の主流だった当時に、身体が横に広がって見える金魚は、特別な価値があったと思われる。現在の日本の「らんちう」は、「小判に尾ひれ」とあらわされる体型であり、上から見ても横から見ても小判に見えると言われている。真っ赤と言うより少し黄金色で、なおかつ背中がきらきら輝いていれば、小判のように見えるだろう。

また、江戸時代に江戸で「らんちう」のことを「マルコ」ⁱⁱ（丸っ子）と呼んでいたのは、正に「らんちう」の形態が「まるっこい」と見たからそう呼んだのであろう。

③ 輝鏡化

上から見て背中鱗が正面から見えることにより、魚影がきらきら光って見えるようになった。

自然界の魚は外敵から身を守るため、その身体を色で保護している。水上から魚を狙う鳥などに対しては、背中を黒っぽくして、上からよく見えないようにしている。また、下からの攻撃に備え、水面のキラキラに身を隠すために下部を白っぽくキラキラした鱗で覆っている。これらは自然界の生きる術である。

金魚の場合は、人工的な環境で飼育されて、身の安全が確保されているので、外敵から身を守る保護色は、必要なくなった。このことにより、金魚の身体は全体に赤くなることが可能となった。また、鱗の裏側にある虹色素胞という光を反射する膜が背中で勝れば、背中也きらきら光ることになる。背びれがなくなることにより、この虹色素胞が背中で活躍できる素地ができたと言える。

「らんちう」の背が金色に光って見えるのは、鱗の向きとも関係している。松井佳一「金魚」(1963)では、「背鰭のない品種で多く見るものであるが、普通鱗の中で少数のものが處々に特に光線を反射して黄金色に光るものがあることがある。」と説明されている。自然状態では見えない角度から鱗を直視することができるようになり、魚影がきらきら美しく見えるようになったと言える。

安達喜之の「金魚養玩草」(1748)で、「らんちうハ・・・背ひれなく 金 尾より首ぎハ迄登り・・・」と書かれているはこのことを意味している。

④ 目幅拡大

体が太くなったことにより、目幅（目と目の間の距離）の広い魚が可能となったといえる。この目幅の広がりにより、頭部も大きくなることができた。もちろん、日本の「ナンキン」ⁱⁱⁱのように金魚の原型に近く、頭の

小さい品種も存在する。一方中国の「獅頭(Lionhead)」^{iv}と言われる品種は、かなり頭が大きく、雄ライオンのような風貌である。頭が大きければ目と目の間隔は広くなる。このことは、日本の「らんちう」の世界では「目幅がある」と表現されている。

なお、頭部の拡大という進化は、背びれがあっても可能なように思われるが、実際には背びれのない品種の中に大きな頭を持っているものが出現している。

3.2 背びれがないことの意味

3.1に記した体形の変化は、日本の「らんちう」の鑑賞にとっては特に重要であると考えられている。この、背びれがない「らんちう」は、横から見て、丸い背が櫛の背のように整っているのが可愛い、面白いと思う人もいるだろう。でも、その意味は、それだけに止まらない。

本来背びれは、身体の平衡を保つのに役立っている。だから、一義的には、背びれがないことにより、背びれのない金魚は身体の平衡感覚が鈍って左右に揺れるように不安定な泳ぎを余儀なくされると言える。よちよち泳ぐ魚が可愛いと思う人も多いだろう。ただ、見た目にはそれほど顕著に泳ぎが不安定だとは思えない。よちよち泳ぐのは、尾が開いているせいでもあるので、開き尾の金魚には共通していることとも言える。

さて、そのほかに背びれがないことの影響はどこにあるのだろうか。それは、既述の通り、上から見たときの身体の幅、太さである。背びれが無くなると、それまで、背びれを支えていた骨も筋肉も必要がなくなる。元々金魚の背びれのあった場所は少し盛り上がって

いたはずだが、背びれが無くなれば、その場所が平らになっても何ら不都合は生じない。そういうことで、だんだん背が（横から見て）高くなり、平坦になってくる可能性がある。実際に背が平坦になってくると、身体が丸太のように太くなってくるはずである。こうして「背幅がある」「らんちう」ができる。「らんちう」は、上から見ると寸胴（頭から腹にかけて同じ太さ）に見えるようになる。これが「らんちう」の体型の醍醐味である。この身体の太さは、上から見てこそ楽しめる「らんちう」の特徴となっている。

なお、飼育側の人間にとって、「らんちう」に背びれがないと若干不便なこともある。飼育する人は金魚の健康状態を見るとき、背びれのある品種ならば、背びれがきちんと立っているかどうかで、健康状態を識別することができる。元気のない金魚は背びれが立っていない。背びれのない金魚の場合はこの方法で健康状態を判断できない。これが不便な点である。ただし、慣れてくると、泳ぎ方そのもので健康を判断できるので、背びれがなくても問題はない。

4 背びれの欠如の過程

背びれの欠如はどのようにしていつごろから現在のようになったのかについて考えてみたい。

「らんちう」をある程度長期にわたり繁殖させた経験がある人なら分かると思うが、少し前まで背びれのある子が生まれることがよくあった。筆者の経験では生まれてきた子の殆どに背びれがあったこともあった。今日の日

本では、背びれのある「らんちう」は価値がないと言って、ハネてしまうが、この変異が現れた当初は、部分的に欠如するものが多かったと思われる。また、背が綺麗に湾曲するのではなく、凸凹な背が多かった時期もあったと推察される。

松井佳一（1935）によれば、らんちうの「背鰭の欠除性は、固定的でなくて已に幾十代を淘汰して居るにかゝらず尚ほ完全なものゝ出現率は、40%内外のものであつて、内には背鰭の完全にあるものまで出現し、退化した背鰭のあるもの、又突起のように残るもの、又背部が凸凹して居るものなど出現して来る。」と説明されている。

当時は今のように全く背中にひれがないのではなくて、一部にひれなどが残った個体もあったようだ。このことを示す金魚の画図が中国にも日本にも存在する。特に中国では、これらの中間段階が新しい種類として評価された時期もあったようだ。

4.1 中国における背びれの欠如した金魚

4.1.1 文献に見る背びれの欠如した金魚

背びれのない金魚は、1596年に初めて出現したと書かれている中国の書籍もあるが、根拠が示されていないので、確認できない。一般的には、中国で背びれのない金魚が確認できるのは、公刊本では清朝初期（1726年）に発行された「古今圖書集成」博物彙編の禽虫典に掲載された金魚図（図3参照）だと言われている。図の右下の金魚に背びれは見えない。金魚の原型（フナの体型）に近い長手の体型で、背びれがないように描かれている。なお、本文にはそれらしき文章は見当たらない。

しかし、「古今図書集成」より少し前の清朝初めの1688年に刊行された当時の園芸書である「秘傳花鏡」(陳湔子編)にも背びれない金魚の図が描かれている。この場合も、金魚に関する説明文の中には背びれないことは触れられていないが、挿絵の部分に背びれない金魚と背びれのある金魚がそれぞれ1匹ずつ描かれている(図4参照)。この図でも、フナのような長手の体型で、背びれがないように描かれている。この図が中国の公刊されている資料上で最古の背びれない金魚と言えるだろう。

4.1.2 絵画に見る背びれの欠如した金魚

公刊本ではなく、芸術作品では上記4.1.1とは様子が異なる。魚を描いた絵画では、宣徳四年(1429年)の銘がある宣徳帝「魚藻図^v」(図5、6参照)に背びれない金魚が多数描かれている。日本における金魚研究の先駆者として知られる松井佳一「カラーブックス 金魚」(1963)によれば、「ランチュウの原種として背びれないマルコは金魚の原種から早く変化してきたようで宣徳四年(1429)の銘記のある宣宗皇帝筆魚藻図に描かれている。」と説明されている。

この「カラーブックス 金魚」に掲載されている「魚藻図」の写真は小さくて、金魚に背びれがあるのかないのかよく判別できなかったが、今回新たに手に入れた国立文化財機構東京文化財研究所のデータベースでは、確かに、「魚藻図」に長手の体型で、なおかつ背びれがない魚が多数描かれていることが確認できた。

本稿の作成に当たっては、同研究所作成のガラス乾板データベースを利用した。これは、

1932年に同研究所において千原興一^{vi}が持っていたものを写真(ガラス乾板)に保存したものであり、その当時に研究に不可欠な資料として認識されていた美術品・文化財の画像である。当時はカラー版のガラス乾板もあったはずだが、データベースでは色彩が分からない。但し、この写真を見ると濃淡の具合から原本は彩色のものだったと推察される。

一般に「魚藻図」は、繁栄を象徴する吉祥画と言われている。図5及び6の「魚藻図」(それぞれは、「魚藻図」全体的一部分)は、宣徳帝(宣宗^{vii}皇帝)が臣下の大学士夏原吉に下賜した画という形式になっていて、皇帝の印章も押されており、もらった夏原吉が返礼の言を最後に書くなど本格的な形式のものになっている。夏原吉(1366～1430年)は、宣徳帝に重用された実在の人物である。描かれている金魚が実在の魚を写生したものかどうかはよく分からないが、当時空想の魚を画にすることはなかっただろうから、多少のデフォルメがあるとしても、背びれない金魚が実在したものと思われる。

この画は、横に長く2m以上あり、金魚が40匹以上描かれているが、皆背びれが描かれていない。それも完璧に背びれがない魚ばかりである。出目のような魚も描かれていて当時これらの背びれない金魚、出目の金魚、さらには更紗、紅白模様の金魚が実在していたとしたら、この画はこれまでの中国での通説を大きく覆す内容となっている。これらの金魚は当時極めて珍しいものとして皇帝に献上され、一般的には知られていなかったものと推察される。

この「魚藻図」は、元々中国で作成されたものであろうが、中国国内では知られていな

いようであり、中国人が書いた書物には紹介されていない¹⁰。日本人でもこれまで松井佳一しか紹介していない貴重なものである。この画は、1429年のものであり、文献上明らかにになっている上記4.1.1の時期よりもかなり早い時期のものである。

4.1.3 皇帝の愛した「角^つらんちう」

台湾台北市にある国立故宮博物院に所蔵されている乾隆帝の紫檀雲龍紋多宝格の底に玉器を置く台座があり、その基底部に金魚が描かれている。この紫檀雲龍紋多宝格は、台湾の公共電視（テレビ）がフランスのARTEと共同で2010年に制作発行した台湾故宮博物院収蔵品DVDビデオである「皇帝的玩具箱」においても紹介されている。また、2017年から2018年にかけて特別展「ブランドの物語－乾隆帝の文物コレクションと包装の美」が同院で開催され、同じ紫檀雲龍紋多宝格が、「清乾隆 雕紫檀蟠龍方盒百什件」¹¹として紹介されている。

最近では国立故宮博物院で収蔵品の画像データベース化が進められており、同院のOPENDATA（故宮Open Data 專區）において検索しダウンロードもできる。こうして公衆の目に触れるような文物であるが、そこに描かれている金魚の画に注目する人はいない。

中国清朝の乾隆帝（1711－1799年、在位期間1735－1795年）は、芸術文化に造詣が深く、小さく精巧な芸術品を納める宝箱を作らせて持ち歩いたとのことである。こうした宝箱の中に紫檀で作られ周囲に彫りを施した箱で「紫檀雲龍紋多寶格方盒」というものがあ

り、故宮博物院に展示してあった。何気なくこれを見ていたら、箱の下部に金魚が描いてあり、良く見ると普通の金魚の画ではなく、背びれない金魚の画だった。四匹描いてあったが、一匹は完全に背びれないように見えるものの、残り3匹は帆柱（背びれの欠如の痕跡があるもの）が立っていた。この帆柱の立っている金魚は、その形態から「角^つらんちう」と呼んでも良い魚である（図9参照）。

図10のように、清朝の皇帝は朝服に仏教を信仰している証として、頂上に仏塔を模した帽子をかぶるのが習わしだったそうである。この様は、遠目には頭に突起があるように見え、これを金魚に表現すると図9のような金魚になると考えられる。したがって、乾隆帝は意図的に背中に突起状のひれの残る金魚を愛でたのだと推察される。つまり、当時既に背びれの完全になかった金魚が存在していたにもかかわらず、図9のような角の生えたような金魚が描かれているのは、この画の金魚が背びれの欠如する過渡期を現わすものではなく、清朝皇帝の仏教を信ずる姿勢を現わした特殊な形態の金魚を現したものであると考えられる。

清朝当時の中国では、金魚の背びれの欠如は一般的にはまだ珍しいものだったと推察される。完全に欠如しているものではなくて、帆柱の立っているようなものも、その帆柱に特別な芸術性を見出し珍重されたのだろう。サイの角のように、あるいは伝説上の動物であるユニコーン（一角獣）のように背中に角が生えているかのような魚は、特別意味のある魚だったかもしれない。なぜなら、皇帝の宝箱のなかでも、「多宝格」と呼ばれるものは、一級品を集めるための宝箱だそう

の中に角のある金魚が描かれているのだから、描かれている金魚は、皇帝に特に愛されていたものだったと推察される。

この宝箱の制作年ははっきりしないが、乾隆年間ということなので、乾隆帝が在位した1735年から1795年の間に作られたものであろう。描いた人は、同画左側に「臣楊大章恭絵」とあるように、楊大章という宮廷画家だということが分かるが、同人は18世紀後半に活躍していた人ようである。

4.2 日本における背びれの欠如した金魚

金魚が中国から日本に最初に持ち込まれた時期には諸説あり、1504年大阪の堺に金魚が伝えられたという記述も残っている。しかし、金魚は実際にはこうした記述の頃より前から中国から持ち込まれていたと想像される。ただ、その実情は良く分かっていない。

現在において、昔の金魚の様子を知る手立ては、絵画や書籍によるしかない。一般に知られているものとしては、江戸中期の喜多川国芳の漫画的に描いてある「金魚づくし」がある。しかし、このほかにも良く探してみると江戸時代には金魚の画図が残されている。これらの画図は、芸術作品として描かれているものと、本草学の博物誌に描かれているものがある。

4.2.1 文献・資料からわかる背びれの欠如した金魚「らんちう」

日本に背びれのない金魚が入って来たのは、江戸時代の前期であり、遅くとも1750年頃には一部の好事家などには認識されていたものと思われる。それは、そのころに書かれた書物や博物誌に「らんちう」という名前が登

場するからである。最も早いものは、安達喜之の「金魚養玩草」(1748)である。

「金魚養玩草」は、我が国の最初金魚の飼育方法を書いた書物と言われている。この書では、「らんちう」についての記述箇所があり、「らんちうハ魚のかたち頭大にして胴丸く長し 背ひれなく 金 尾より首ぎハ迄登り…」「らんちうハ首^{かしら}ぎハより尾をふしたたず正直なるを上品とするなり すこしにて背ひれつき又ハ背ひれのところふしたちて金の間きたるは悪し」と書かれている。つまり安達の「金魚養玩草」の解説では、「らんちう」は、背びれがきれいに欠如していて背が凸凹でないのが上品だとされている。

また、「金魚養玩草」の後編に当たる「金魚秘訣録」(1749)には、「らんちう」の図(図11)が描かれている。この図は、現時点で分かっている我が国最古の「らんちう」の図と言える。

金魚秘訣録では、この図は、らんちうの子魚の図と説明されている。実際には魚の周りに解説も書かれている。

4.2.2 本草学の「らんちう」

① 博物誌としての「衆鱗図」

江戸時代中期の宝暦年間(1751-63)に、日本最古の精細な背びれのない金魚「らんちう」図が描かれていた。江戸時代後期の文化文政期(19世紀)には、金魚文化は庶民の間まで広まっていたが、それより50年以上も前に、四国高松藩の博物大名として知られる藩主松平頼恭は、絵師に命じて実物の魚を精細に写生させ、その特徴を良く捕らえた魚類図譜「衆鱗図」*を完成させた。その図譜に所収する魚類等の数は652点に上る。

「衆鱗図」の作成を命じた松平頼恭は、1711年から1771年までの人で、「衆鱗図」の作成開始時期は分からないし、絵師も誰であるか分からない。しかし、宝暦年間（1751－63）末にはその「衆鱗図」の見事さが評判になっていたようだ。江戸時代の博物書には図譜が転写されたものが多いようだが、この「衆鱗図」は、他の図譜から転写されたものでなく、実写によるオリジナルのものとされている。

なお、博物誌としての江戸時代の「らんちう」の図譜としては、栗本丹洲（1756－1834）の「らんちう」図が有名であるが、磯野直秀（1994）によると、栗本丹洲の作成した「らんちう」図は、「衆鱗図」に描かれている「らんちう」を転写したものであるとのことである。

②「衆鱗図」中の「らんちう」

「衆鱗図」に掲載されている魚は、図譜ができて上がる前に実物が存在していたことを意味しているので、この図譜の中に「らんちう」が掲載されていることは、たいへん意義深い。わが国で「らんちう」の存在が確認できる資料としては、金魚に関する専門の飼育書である安達喜之が書いた「金魚養玩草」（1748）があり、その翌年に出版された「金魚秘訣録」にイラストの「らんちう」図があるのは既述のとおりである。これが日本における「らんちう」図の嚆矢だと考えられている。しかし、「衆鱗図」掲載の「らんちう」は、「金魚秘訣録」の発行時期と大差ない頃のものであり、なおかつ非常に詳細なできになっている。金魚の研究者で、これまでこの「衆鱗図」を取り上げた人は寡聞にして知らない^{xi}。

「らんちう」は、成魚が6匹、子魚が5匹

描かれている。これらの資料により、既に18世紀半ばには一部の好事家によって日本で「らんちう」が飼育されていたことが分かる。また、「らんちう」と呼ばれていたことも分かる。6匹の成魚「らんちう」図（「衆鱗図」裏46～48）の付札（張り紙をして魚の名前などを解説してあるもの）には、それぞれ「蘭チウ 銀フチ^{xii}四尾」「ランチウ ムヒレ」「ランチウ 金フチ三尾」「ランチウ 無ヒレ」「ランチウ 一分ヒレ」「獅子頭^{xiii}」と書かれている。このように、尾については三尾と四尾が区別されている。また、「無ヒレ」とは背びれがまったくないもの、「一分ヒレ」とは背びれの痕跡が残っていて、こぶになっているものを指すようである。

このように当時の「らんちう」は、背びれの欠如性は完全ではなく、帆柱のようにひれの一部が残った魚もいたようである。「衆鱗図」の中に、「無ヒレ」と「一部ヒレ」の当時の「ランチウ」が左右に並べられているものがある。この図の作り方は、本草学的に実物を正確に描いた結果であろうと思われる。また、ランチウの子として、ヒレの一部が残っている魚（図13参照）や背の凸凹の魚も描かれている。これらの図により、日本で「一部ヒレ」がそれなりの評価を得ていたかどうかは分からない。おそらく、これらは、当時こういう魚も出現していたことを正確に記録したものだろう。

③「梅園魚譜」の「マルコ」

毛利梅園（1798－1851）は、草花や鳥、虫、魚などを描いているが、その大半が実物を描いたことで知られている江戸時代の博物家である。天保6年（1835年）に発表された毛利の「梅園魚譜」には、背びれのない金魚が描

かれています。図の中の解説には、「金魚 雛ヲ呼デ丸ル子ト云金魚ノ最上ナル者」と書かれています。さらに、図の右下に「戊年三伏朔日机下水盆養之真寫」と添えられているので、これも実写であり、この図を描いた年は戊年なので1826年だろうと推察される。

図を見れば分かるように、背びれはないものの、背中に凸凹、つまり背びれの痕跡、角と言っても良いものがあり、奇妙な金魚図である。当時の「マルコ」はこのように完全に背びれのない魚ではなかったのかもしれない。さらに、この魚は体型が文魚^{xiv}に近く見える。つまり、「リュウキン」の体型で頭が小さく、尾が長く、背びれがないような魚に見える。「雛」と言っているのも、まだ子供の魚だろうと思うが、江戸時代の背に凸凹のある背びれのない金魚の図としては、衆鱗図とともに珍しいものである。

4.2.3 芸術作品（文人画）にみる背びれの欠如した金魚

江戸時代の絵画には金魚が多く描かれているが、金魚を題材とした絵画の先駆として、柳沢淇園（1703－1758年）の金魚図があげられる。この金魚図の製作年代は定かでないが、図16のとおり、この画では全て背びれのない彩色の3匹（紅白2匹、黒1匹）の金魚が描かれている。

また、江戸時代の背びれのない金魚の画としては、宋紫石（1715－1786）の金魚図があげられる。この金魚図の製作年代も定かでないが、この画でも全て背びれのない3匹の金魚が彩色（赤、紅白、黒）で描かれている。

これらの文人画に見る背びれのない金魚は、背に凸凹がない。本草学の金魚では背びれの

痕跡を描いているものもあり、これらとは対照的である。安達が「金魚養玩草」で解説しているように、世間一般には背びれが全くない金魚が好まれたようである。

5 背びれのない金魚の品種

最近輸入されている金魚を除くと、日本の金魚で背びれのない品種は、「らんちう」（「大阪ランチュウ」を含む）を除くとあまり多くない。「ナンキン」は、江戸時代から飼育されている現代の「らんちう」の祖先に近い品種で、頭が小さく、白勝ち更紗の色彩の背びれのない品種である。この外には、戦後に開発された「らんちう」の色違いとも言える「江戸錦」、「桜錦」（「らんちう」と「東錦（三色出目金とオランダ獅子頭の交配により作られた金魚）」を交配したもの）、及び「らんちう」と「オランダ獅子頭」との交配種である「シュウキン」（「秋錦」）くらいとなる。

背びれのない金魚で目の部分に特徴のある金魚には、「朝天眼（チョウテンガン）」^{xv}、「水泡眼（スイホウガン）」^{xvi}「鼓眼虎頭」^{xvii}「ハマ頭」^{xviii}などの品種がある。「朝天眼（チョウテンガン）」は、出目の眼球が上を向いている品種で、明治時代に中国から輸入されたものである。「水泡眼（スイホウガン）」は、目の下に風船のような袋（水泡）ができていて、見た目はかなりインパクトがある品種であり、戦後日本に輸入されたものである。「鼓眼虎頭」（図17参照）は、目が大きく左右に突出した背びれのない品種である。「ハマ頭」は、「スイホウガン（水泡眼）」の水泡が膨らまないほど小さいものである。

現在、東アジア、東南アジアで金魚生産が盛んであり、黒、青^{xix}、茶、メノウ色から、かなりの新しい色合い、模様の背びれのない金魚（いろいろな名称で呼ばれている）が日本に輸入されている。日本から種を持ち出し、現地で改良が加えられているとも言われている。

もともと、中国では、「蛋種」^{xx}として背びれのない金魚が何種類か存在していた。これらの中には日本の「らんちう」の原型になったものもある。中国では「獅頭」、「虎頭」^{xxi}が有名であるが、上述の品種のほか、「鵞頭紅（ガトウコウ^{xxii}）」（図18参照）などの品種がある。「鵞頭紅」はその名の通り、ガチョウ（鵞鳥）の頭のような頭上に前方に付き出しているような肉瘤を持ち、その部分だけが赤色化している背びれのない品種である。

なお、筆者の「獅頭」「鵞頭紅」、「朝天眼」、「水泡眼」、「鼓眼虎頭」の繁殖経験では、現代の中国の金魚で背びれのない品種は、背中の凸凹は幾分あるものの、ひれの欠如性はかなり高い。繁殖させても殆ど背びれは出現しない。

6 まとめ

中国の15、16世紀の文献・美術資料から分かる背びれのない金魚は、金魚の原型である「ワキン」型の魚であって、これの背びれが欠如したものであることが良く分かる。このことは、松井佳一が「科学と趣味から見た金魚の研究」や「カラーブックス金魚」で作成した金魚の系統図で「マルコ」や「らんちう」が「ワキン」からできたものであるとし

ていることの裏付けともなる。

中国では、殆どの研究者が、18世紀初めに完成された「古今図書集成」博物彙編の禽虫典に掲載された金魚図に現れた背びれのない金魚が中国での最初のもので解説している。しかし、本稿での調査結果では、これまでの通説とは異なり、約300年前の15世紀まで遡るという結果となった。

中国の有名な金魚の遺伝研究者の王春元は、その著書「中国金魚（修訂版）」（2000）で、南宋から明に至るまでの1280–1546年は、金魚が家の池から樽や甕で飼育されるようになるまでの過渡期としていて、この時期には新しい品種ができなかったと書いている。しかし、本稿で見てきたように、明朝の宣徳帝の時代（1429年頃）には背びれのない新しい品種の金魚が存在していたと推察される。

日本の文献、画図では18世紀に背びれのない金魚が見られるようになった。これは当該魚が中国から日本に持ち込まれるまで時間がかかったことを現わしている。日本の本草学では、背びれのあるものや、背が凸凹になっている金魚が描かれているが、事実を正確に表現するためにそうなったと考えられる。文人画や金魚飼育本にはひれの残った金魚が描かれていないので、日本では背びれが全てないのが良いものとして想定されていたと考えられる。安達の「金魚養玩草」でも、やはり背びれのない金魚「らんちう」は、背に凸凹のないつるんとしている（背びれの痕跡がない）ものが一番良いとしている。

中国でも金魚を愛好する一般庶民の間では、背びれの欠如は完全なものが好まれたようであるが、皇帝のような特別な地位にある人にあつては、欠如の過程の途中の段階の「少し

だけ背びれの痕跡があるもの」、背中が角^{つの}の
ようにとがっているものを特別な価値がある
ものとして愛好することがあったようである。
このようなことは、日本では確認できないこ
とである。

そして、現代ではこの中間的な欠如状態を
愛好する人はいなくなり、完璧に欠如する魚
が世界中で良しとして飼育されている。特に
日本の「らんちう」の完成度を高く評価する
人が世界中に多い。

<参考文献>

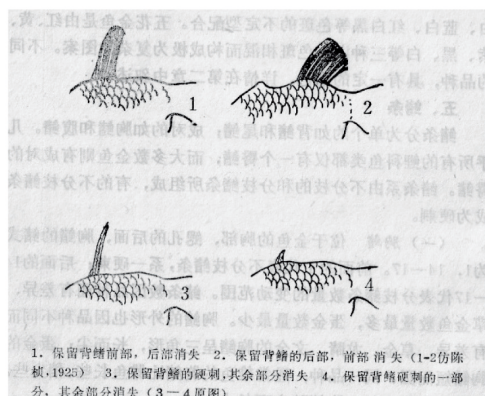
- 1 「中国金魚」 伍惠生、伝傳毅、天津科学技術出版社、1983
- 2 「カラーブックス 34) 金魚」、松井佳一、保育社、1963
- 3 「高松松平家所蔵 衆鱗図」、香川県歴史博物館編、香川県歴史博物館友の会博物図譜刊行会、2005
- 4 「『衆鱗図』と栗本丹洲の魚介図」、磯野直秀、慶應義塾大学日吉紀要 15 号、1994
- 5 「中国金魚（修訂版）」王春元、金盾出版社、2000
- 6 「中国金魚文化」劉景春、珍楨等、三聯書店、2008
- 7 「科学と趣味から見た金魚の研究」松井佳一、弘道閣、1935
- 8 「金魚文化誌－書誌学的考察－」松井佳一、鳥海書房、1987
- 9 「金魚養玩草」安達善之、1748
- 10 「金魚秘訣録」安達善之、1749
- 11 「きんぎょ Kingyo」高岡一弥、久留幸子、パイインターナショナル、2011

図1 背びれのない金魚の代表格である「らんちう」



(出典) 著者撮影

図2 背びれの残った金魚の背部の4つの類型



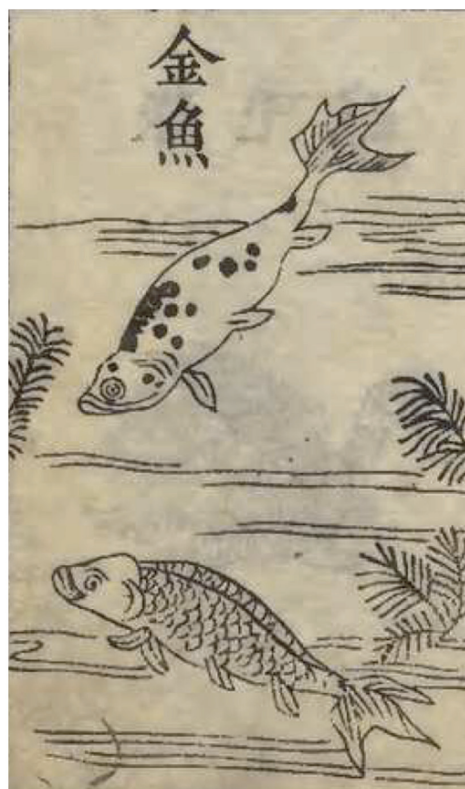
(出典)「中国金魚」(1983)

図3 「古今図書集成」金魚図



(出典)「古今図書集成」

図4 「秘傳花鏡」金魚図



(出典)「秘傳花鏡」(国立公文書館デジタルアーカイブ)

図5 「魚藻図」(部分)



(出典)「宣徳帝 魚藻図」(東京文化財研究所データベース)

図6 「魚藻図」(部分)



(出典)「宣徳帝 魚藻図」(東京文化財研究所データベース)

図7 「紫檀雲龍紋多宝格方盒」



(出典) 国立故宮博物院 OPEN DATA

図8 「紫檀雲龍紋多宝格方盒」底部



(出典) 国立故宮博物院 OPEN DATA

図9 「紫檀雲龍紋多宝格方盒」底部の金魚部分の拡大図



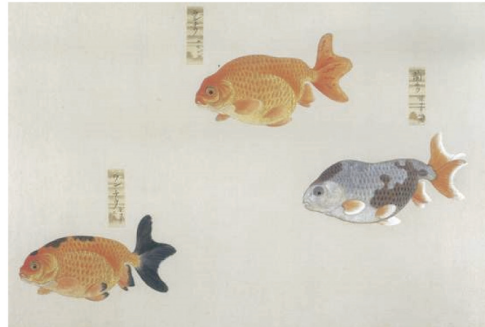
(出典) 国立故宮博物院 OPEN DATA

図10 乾隆帝朝服像（ジュゼッペ・カスティリオーネ郎世寧画）



（出典）故宮博物院
<http://www.dpm.org.cn>

図12 「衆鱗図」中の「らんちう」



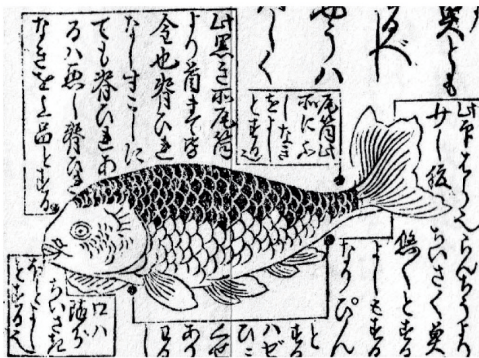
（出典）「高松松平家所蔵 衆鱗図」

図13 「らんちう 一部ヒレ」



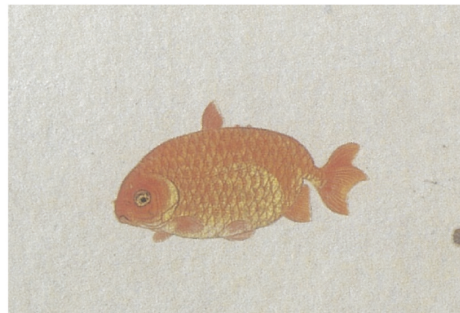
（出典）「高松松平家所蔵 衆鱗図」

図11 「金魚秘訣録」中の「らんちう」図



（出典）「金魚秘訣録」

図14 「らんちうの子」



（出典）「高松松平家所蔵 衆鱗図」

図15 梅園魚譜の金魚図



(出典)「梅園魚譜」(国立国会図書館デジタルコレクション)

図16 柳沢淇園の金魚図



(出典) 箱本館「紺屋」金魚コレクション

図17 「鼓眼虎頭」



(出典) 著者撮影

図18 「鰲頭紅」



(出典) 著者撮影

<文末脚注>

- i 「らんちう」は、現在「らんちゅう」又は「ランチュウ」とも表記されるが、江戸時代は「らんちう」又は「ランチウ」と表記され、現代でもこの表記が使われている。
- ii 「丸っ子（マルコ）」は、背びれない金魚の呼称であり、江戸時代の江戸方面での呼び方と言われている。
- iii 「ナンキン」は、頭が小さく、白勝ち更紗の色彩の背びれない品種である。「出雲ナンキン」とも言い、島根県出雲地方で飼育されてきた。島根県の天然記念物に指定されている。
- iv 中国では肉瘤が発達して、頭が雄ライオンの鬘のような形をしている背びれない品種を「獅頭」と呼ぶ場合が多いが、背びれのある「オランダ獅子頭」に相当する品種を「獅頭」と呼ぶこともある。
- v この魚藻図について、出版物上で触れている日本の金魚研究者は松井佳一のほかにいないので、当時松井が自分で持っていたか、近くの利用できる範囲にあったものと推察される。
- vi 千原與一は、明治18年大分県日田町（現日田市）の旧家に生まれた。臼杵新聞支社の「大分県実業家伝」（1918年）によると、酒造業を営む傍ら古書画を多数所有し鑑識眼は素晴らしかったとされている。しかし、千原がなぜ宣宗皇帝魚藻図を所持していたのかは、よく分からない。
- vii 明朝第5代皇帝の宣徳帝は、1399年に生まれ1435年に崩御した。廟号は宣宗である。明の全盛期の皇帝であった。宣徳帝は文人画に優れた作品を残したと言われている。
- viii 東京文化財研究所のアーカイブで宣宗皇帝魚藻図が公開されるようになってから、海外でもこの金魚図に注目する人が現れている。2021年になってアメリカ在住と思われる中国人らしき人がこの魚藻図のことを詳しくウェブ上の動画（YouTube）で紹介している。
- ix 同展覧会を紹介した国立故宫博物院ホームページのURLは、以下の通りである。
（2022年3月21日閲覧）
<https://theme.npm.edu.tw/exh106/brandname/jp/page-2.html#main>
- x 「高松松平家所蔵 衆鱗図 第一帖～第四帖」、香川県歴史博物館友の会博物図譜刊行会 平成13年～16年発行、香川県歴史博物館編集。なお、「らんちう」図は、「衆鱗図 第三帖」に掲載されている。
- xi 金魚の研究者ではないが、博物学の研究者である荒俣宏は、1985年のアニマ7月号（平凡社）の「江戸の博物図鑑3 松平頼恭」で、衆鱗図の「らんちう」図が「金魚史の研究上興味深い」と紹介している。
- xii 銀フチ、金フチとは、上から見たときに腹の側面が白色又は金色でフチがあるような柄（背の部分は退色前の黒が残っている）のものを言うらしい。
- xiii 今の「らんちう」なら肉瘤が発達して獅子頭も龍頭もあるが、この図譜を見ても肉瘤らしきものは見当たらない。にもかかわらず、獅子頭と命名してあるということは、当時老魚になると頭に少しコブができていたのかもしれない。安達喜之の「金魚養玩草」にも獅子頭というものがあることが書かれている。
- xiv 「文魚」とは、中国における金魚の品種の分類の一つであり、金魚の形成過程の初期に現れた漢字の「文」に似た体型をもつ金魚とされている。日本の「リュウキン」に近い体型の魚である。特徴としては、頭が小さく口先が尖り、尾が開いている。
- xv 日本で「頂天眼」と表記するのは慣用表現であり、正確には「朝天眼」である。「朝」には、「…を向く」という意味がある。
- xvi 「スイホウガン（水泡眼）」の水泡の中にはリンパ液が満たされている。
- xvii 「鼓眼虎頭」は、突出している目が鼓のように先端が平らで円柱状になっていることから、「鼓眼」という名称が冠されている。
- xviii 「ハマ頭」の「ハマ」とは中国語で「蛤蟆」と書き、（ヒキ）ガエルの意味である。
- xix 金魚の色の「青」は、ブルーではなくて、フナ色に近い色である。
- xx 「蛋種」とは、身体が卵のように丸い背びれない金魚の分類上の表現である。
- xxi 中国では肉瘤のあまり発達していない背びれない品種を「虎頭」と呼んだりしている。
- xxii 日本では白い体色で頭の頂点だけが赤い背びれない品種を「ガトウコウ」と呼ぶことが多い。